
魔王討伐について来ただけです

美琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王討伐について来ただけです

【Nコード】

N2084X

【作者名】

美琴

【あらすじ】

クラスメイトと一緒に異世界に召喚された主人公。賢者と慕われるクラスメイトと共に従者のポジションで勇者たち率いる魔王討伐に向かいました。ひねくれた主人公がぼんやり傍観気味に展開する異世界物語。後の方は恋愛をちょっぴり展開したいな〜と、思っています。

異世界での理不尽な始まり

「ついに見つけたぞ！これで貴様も終わりだ魔王！！」

魔王討伐に来た勇者たちご一行が目の前に現れた魔王様に向かって叫んでいた。

私かというと

ああ、この人が魔王様なんだ…

と、目の前の人物と成り行きをぼんやりと見ていた。

なぜ私がラスボスを目の前にこんな投げやりかということ

ことの始まりは1年ほど前。いや、本当はもっと前からなんだろうけど。

2

1年ほど前、私は突然この世界に召喚された。同じクラスの由梨乃ちゃんと一緒に。

もともと同じクラスと言っても由梨乃ちゃんと私は特別仲が良いというわけではなく、むしろ人と話するのが苦手な私はほとんど話したことがなかった。

なぜそんな2人が一緒に召喚されたのか。

それはたまたま学校帰りのバス停で一緒になった瞬間と召喚される瞬間が重なったから。

あと少して1つ前のバスに乗り遅れた私が1人でバスを待っているところに、由梨乃ちゃんが来たのだ。目が合って、同じクラスだし挨拶くらいしようと思いを開きかけたところでトリップ。

召喚されたとき、周りには王様やら魔術師やら騎士などが集まっ
ていてみんなこちらを見ていた。

そして

「賢者さま、どうか我々に力を貸してくださいませんか？」

と、イケメンな勇者様が言ってきた。…由梨乃ちゃんに。

この世界、てゆうかこの王宮、仕える人はぜったい『美形であること』が雇用条件に入っていますよね？と言いたくなるくらいみんな美形。

そんな中、見た目で器量よしの由梨乃ちゃんと不器量の私は彼らにとつて既に雲泥の差があったのだらう。

ちくしょう。そりゃ私はブスだけどさあ、鏡見れば割れるってほどじゃないぞ！むしろ私が普通レベルだ！…たぶん。

そして極めつけに、魔術の属性。由梨乃ちゃんが多数の属性を持っていたのに対して私は無属性。つまり私には魔術がいつさい使えなかった。ちなみに普通は1人1つは属性を持っているらしい。

これが明らかになったときの周りの反応は

「ああ、やっぱり。」

という納得の顔だった。

くそ。せめて力がチートだったら、人を外見で判断した最低人間どもを見返してやれると思ったのに。何も言えないじゃないか！ああ腹立つ！！

しかしまあ話を聞くとこころ元の世界に戻る術もなく、平和な世の中で暮らしてきたジャパニーズガールとして、危険なことはいらないに越したことはないので期待されないならそれはそれでよかったんだけど…

王様率いる王子様、王女様、その他上層の方々が、役立たずが賢者をおいてのうのうと過ごすことが許せなかったらしい。

暮らすところが無いからと言って役立たず（しかもブス）を王宮で面倒を見るなんて邪魔なだけ。むしろ金の無駄。旅について行かなければ王宮からどころか、国から（身一つで）追い出すと言われてはお金も魔術も頼る人もいない私は領くしかなく、従者的ポジションで旅についていくことになったのだ。

そっちが勝手に呼び出したんだから生活くらい保障しろや！せめて追い出すなら職と住む場所くらい提供しろ！！と思っただけどころか逆らって変なこと言ってしまうえば追い出される前に命を奪われる可能性があったので言葉を飲み込んで首を縦に振った。

かくして私は魔王討伐の旅について行くことになったのであります。

これが私の異世界生活の始まりでした。

異世界での理不尽な始まり（後書き）

基本的に脇役主人公が好きなので、こんな話がもつとあればと思つたものを、個人的なメモ的な感じで書いてみようと思いました。

たぶんざっくりとした話しか書けないので小説と呼べるものになるのかどうかもあやしいのですが、大まかな内容だけでも楽しんでいただけたら幸いです…。

異世界の事情（人と魔族について）

私たちはこの世界に『賢者』として召喚されたらしい。

あ、そこは定番の勇者じゃないんだあ〜

なんて思ったことはどーでもいいけど一応秘密。

いきなりこの世界に引きずり込まれた私たちに、宰相さんがこの世界のことを簡単にお話してくれた。

なんでもこの世界は人族と魔族が存在していてそれぞれの領域にわかれ、普段は互いに全く干渉することなく暮らしているらしい。つまり人族の世界と魔族の世界は完全にわかれている。

個人的には『魔族』というと漫画の悪魔像みたいに角が生えていたり黒い羽が生えていたり耳が尖っていたり…もしくはモンスターといったイメージを思い浮かべたけれど、聞いたところ魔族も人族も外見はほとんど同じで、強いて言えば魔族は人よりも寿命が長く、平均的に200〜300年くらい生きるらしい。

そんなに寿命が長いと大変そうだな〜

なんて呑気なことを考えつつも

ん？人（私を除く）も魔術使えるんだし、じゃあ人と魔族の違い

て何ぞや？

という私と同じ疑問を抱いた由梨乃ちゃんが宰相に聞いてくれた。

人族と魔族の違いというのは、魔術の使い方の違いだ。

人の使う魔術とは精霊の力を借りるもの。水、火、地、風の4つが基本的な属性で、まれに光と闇、そしてさらにごくまれにその他の属性を持つ人がいる。

普通は誰でも1人1つ属性を持つけど、2つ持つ人もたまにいます。3つ以上持っていたらすごいらしい。ちなみに由梨乃ちゃんは基本の4つプラス光属性を持っている。これは国お抱えの魔術師と同じかもしくはそれ以上のレベル。

しかし属性が無ければその属性の魔術が全く使えないかということそんなことはなく、精霊の力の借り方は同じなので基本の4つの属性は得手不得手はあるものの、だいたい誰でも使える。

さて、ここで私の場合

無属性、しかも魔術などない世界の人間の間には精霊の力の借り方などわかるはずもなく魔術が全く使えない。

何、何なの？逆チート！？

この世界は私にとってとても優しくない。

それはさておき、それに対して魔族の使う魔術は自身の持つ魔力をイメージによって発するものらしい。

属性の無い私は実はこっちなんじゃないかとも思ったけど、私には魔力も全く感じられないとのこと。

…あ、そうですか。何となくそうじゃないかって思いましたよ、ええ。(チツ)

しかし属性無し、魔力無しの私でもやっぱりチートではあったみたいで。

その話はまた後ほど。

そして私たちが召喚されたいきさつについて、宰相さんのお話は続く。

異世界の事情（国と諸問題について）

この国の宰相さんのお話によれば

もともと800年ほど前までは人族も魔族も一緒に暮らしていた。しかし種族が違えばそこに差別が生じ、いつの間にかお互い嫌悪の対象となっていた。

魔力により魔術を使う魔族に対抗するために人は精霊を使って魔術を使うことに成功。

しかしそれは争いを拡大させる結果になってしまい、最終的には両族の王の話し合いにより『お互いの領域を完全に分割し、干渉することなく別々に暮らしていく』という結論に至り、深い森や海を隔てて二分してそれぞれの領域とした。

しかしその際、お互いの地に魔力源は均等という王の主張を魔王は力でねじ伏せて魔力源を奪い、その一部だけを王に渡した。

この魔力源というのが世界を満たし、安定させるほどの強力な魔力を持つ魔石である。

不満はあったものの魔力を自在にあやつる魔族、しかも魔王にかなうはずもなく、また世界の全魔力の一部とはいえど領域内の魔力を満たすには全く問題ないほどの魔力源ではあったので王はそのまま無理に争うことはせずに妥協した。

はじめのうちはいろいろと諸問題が生じつつも、それ以来人間と魔族は仲良くもなければ争いもしない、そうやってそれぞれ穏やかに過ごし、それぞれの国が栄えていきましたとさ。

ちなみに魔力源の魔石を代々守っていくことがそれぞれの王族の使命のひとつとなっている。

…というのがこの国、もしくは魔族の国の始まりらしい。

魔王様、精霊、魔術、魔石。なんてファンタジック！

その話が何故賢者と繋がるかというところ

この話の「人間が魔術を使うことに成功した」という部分。
つまりそれまで人間は魔術を使えなかったということ。それを可能にしたのは異世界から来た賢者のおかげということらしい。

ん？人間、まだ魔術使えないのにどうやって賢者呼んできた？

という疑問がわいてきたが

実は彼（あるいは彼女）はもともと魔族が召喚した者で、賢い賢者は悪である魔族ではなく善である人間の味方についたらしい。

子どもに聞かせる教訓じみたお伽話みたいですね…というツッコミは心の中だけにしときました。ええ、空気読みました。私エライ。たぶんここで重要なのは「賢者のおかげで人間が魔術を使えるようになった」という部分のみなんだろう。

当時の王は「今後魔族との間に何かあれば、きっと賢者が知恵を貸してくれるだろう」と、召喚の術を残してそれが代々王族に伝わっていった。

…なんとも迷惑な話である。異次元レベルで無関係な人間巻き込むんじゃないよ！むしろこの世界のことを全く知らない人間にそんな重要なことの一端を任せるのは嫌じゃないのか？いや、嫌じゃないから召喚したんだらうけどさ。（ちなみに賢者以外はこの世界から集められている。）

私たちが召喚されたということつまり、800年前の王様の言う

ところの「魔族との間に何かあった」ということになるわけで。

ここ数年、人が魔族に襲われる被害が相次ぎ、特にここ半年ほどで飛躍的にその数は増えているのだそうだ。襲われた人は皆、国の狭間である森の中で魔族による魔術の痕跡を残して遺体で発見されている。(魔術の痕跡でどちらによるものなのか判別がつからしい。)

襲われた人の仕返しをしようと魔族の国に近づこうとした人間が全員、さらに新たな被害者となるのが被害の増加の理由のひとつみただ。そうやって人間を問答無用で瞬殺するような相手なので、話し合おうにもうかつに近づくことが難しいらしい。

それに加えて、この国では魔石の魔力が徐々に低下してきているというデータが確認され、今のところは特に異常を感じることはない程度だが、放っておけばいつしか魔力が不足してしまうかもしれない。できるだけ早く手を打つ必要があるという。

しかし人間が使う魔術は魔力ではなくて精霊を使うので、無理に魔力を維持する必要はないんじゃないの？

という私の疑問に宰相さんは“やれやれ、これだから役立たずは…”というような目で私を一瞥して面倒くさそうに(きつと私の被害妄想)答えてくれた。

その魔術に必要不可欠である精霊は魔力がなければ生きていけないらしい。確かによく考えれば魔力が必要ないなら800年前に領地を分けたときに魔力まで分配する必要はないか。なるほど。

そこで王様をはじめとする国の偉い人たちは魔族に立ち向かうこととし、また、被害を減らすために彼らの魔力の低下を目的に魔石を奪い、そうすれば国の魔力の回復にもつながると考えて魔族と戦えるよう強い者たちを集めて魔王討伐チームが組まれることになり、

私たちが召喚された。

宰相さんの長いお話に由梨乃ちゃんは相槌をうちながら真剣に聞いていたけれど、私は大人しく、悪く言えばぼんやりと聞いていた。このあたりが一目で賢者と役立たずと判断される人間性の差なのか。期待されていないぶん、召喚された理由を知っても自分にはあまり現実味が持てず「ふーん、そうなんだあゝ…」というのが正直な感想だった。

異世界の事情（国と諸問題について）（後書き）

初めて感想をいただきました！返事をどこに書くものか迷ったんですが、ここなら読んでいただけるかと思ったのでこちらに書かせていただきます。

私自身も風景や人の着ているものの描写なんかを書いた方がいいかと思ったんですが、余計にごちゃごちゃした文章になってしまったのでまずは主人公の置かれた状況についてを重点的に書くことにしました。世界観については次回触れようと思います（＾＾）

しかし白状してしまえばこの話、短編にするべきか迷ったくらいの代物で、あまり冒険のお話にはならない予定なので、もしご期待に沿えなかったら申し訳ありません…（＞＜；）

でもまさか感想をいただけるなんて夢にも思っていなかったのも、ものすごく嬉しかったです。感想とご指摘、本当にありがとうございました。

賢者と役立たずの違いは大きい(前書き)

お気に入り登録の件数が自分か思っていた以上でびっくりです！
文章もお話も拙いので恐縮ですがとても嬉しいです。ありがとうございます！
ざいますー！！

賢者と役立たずの違いは大きい

さて、宰相さんは一通りのお話を終えたあと

「このままでは人間は魔族に虐げられ、ゆくゆくは支配されてしまいます。私たちはそれを阻止するには賢者である貴女のお力がどうしても必要なのです。どうかっ！！どうか我々に力を貸していただけないでしょうか！！」

と、由梨乃ちゃんに懇願していた。

もし私が由梨乃ちゃんの立場なら丁重に（表面上）かつ徹底的に固辞していたところだけど。おざなりに扱われた立場と手厚く迎えられた立場の違いか、それとも元々持っていた正義感の違いか、由梨乃ちゃんは

「私にできることなら精一杯お手伝いします。」

とあっさり承諾した。

そもそも後から考えたら

召喚されて元の世界に帰してもらう術がない

⇨ 問答無用でこちらの世界で暮らさなければならぬ

⇨ 断つたとしても最終的に「魔族からの支配」に巻き込まれる

⇨ 選択の余地ないじゃん。

ということに気がついたけど。それについて故意的なのかそうでないのかは聞く機会を逃したのでわからないままだ。

宰相さんの口ぶり是由梨乃ちゃんに対して話しているのであって私のことは基本的に空気扱いみたいだったし、さっきみたいに質問して馬鹿にしたような態度を取られるのは私の気のせいだったとしても傷つくので余計なことと言わないことにしていた。

でも

『その初代賢者は一連の騒動の後、最終的に元の世界に帰られたのですか？それともずっとこちらの世界に残ったのですか？』

これだけははつきりさせておきたかった。

この質問に対して宰相さんは少しバツの悪そうな表情を浮かべる。

「当時のあらゆる文献を調べてもその後の賢者に関する記載は見つかっておらず、そこは今でも研究や議論の対象になっていません。しかし元の世界に帰す手段があるならそれも召喚の方法と一緒に記載されているはずなので、今のところはこちらの世界で一生を送ったというのが一番有力な説です。人々に語り継がれている話としては一般市民と結ばれて生涯幸せに暮らしたというのが一般的なものとされておりまして。」

「帰れないんですか!？」

『なんでそこで一般市民なんですか？』

由梨乃ちゃんと私が疑問を発したのは同時だった。

私の内容は頭の悪そうな感じMAXだったけど。あ、なんか宰相さ

んの視線が一層冷たくなったような…。

「役目さえ果たしたら後は帰れるのかと思った…」

由梨乃ちゃんの声は消え入りそうだった。

「それに関しては本当に申し訳ないと思っております…しかしこちらがあなたにとって暮らしやすい場所になるべく、できる限りの手助けはさせていただくつもりです。世話を任せる者の配置も決定しておりますし、衣・食・住もこちらで保証いたします。」

という宰相さんの説明に由梨乃ちゃんは少々納得のいかない表情ではありつつも、最終的には

「帰れないのなら…仕方がないですね。迷惑をおかけすることもありますがよろしくお願いします」

と、承諾した。迷惑をおかけするって言うか、むしろ現時点で迷惑かけられてるの私たちだけだね。

宰相さんの説明に対象を表す言葉が“あなた”となっていた時点でうすうす感じてはいたけれど…その対象に私は入っていないらしい。後日、魔王討伐について行かなければ国から追い出すと言われたとき、当然この宰相さんの発言について申し立ててみたら

それは“賢者”に対しての話であって、“賢者”でないお前の面倒などなぜこちらがみなければならぬのか。

というような感じのことをあれこれと言われた。

勝手に呼び出した人間に対して、せめて住む場所と職くらい提供す

るのはマナーなのではないのか？…それとも利用価値ゼロな役立たずを選択肢を与えてる時点でもまだマシなのか？大人の言うところの“ゆとり世代”の私には不満タラタラだったけど、男性の方々は腰に剣を携えている方も多かったので、余計なことをして殺される前に首を縦に振りました。こんなところで死んでたまるか。

帰れないことにショックを受けて未だに少し動揺と落胆を隠せない由梨乃ちゃんを心配した宰相さんはこれでお話を終わりにして、今日はもうゆっくり休むようにと部屋に案内された。

あれ、私の疑問無視された？

…別にいいけど。

賢者と役立たずの違いは大きい(後書き)

「世界観について次回触れる」と書いたのに世界観を入れることが
できませんでした(- - ;)

説明ばかりの文章でごめんなさい…

諦めのおまじないと先人の偉大な言葉

1日目に部屋に案内された後はメイドさんが持ってきてくれた夕食を食べてシャワーを浴び、即刻眠りに落ちた。

目が覚めたらいつも通り学校へ通う日常なんじゃないかって期待もしたけれど…そんなに甘くはなくて軽く絶望しかけたのを覚えている。

メイドさんが用意してくれた服を着て、持ってきていただいた朝食を部屋で1人ほおばりながら頭の中で「夢から覚めろ」と何度も念じていた。もぐもぐ。

けれども夢であってほしい目の前の光景はまぎれもなく現実であつて。食後のすっかり冷めたお茶を飲んで溜め息を吐き、とりあえず何かいろんなことを諦めて割り切ることにした。ズズズツ…フー。

『ま、しゃーない（仕方ない）か。』

あらゆることから目を背けることのできる便利なおまじない。この言葉でたいていのことは受け流せる。ある意味現実逃避である。

いくらファンタジーが好きとさえど

いくら小さい頃から『できるなら魔法使いになりたかった…』と思っ
つていようとも

そして実は未だに現在進行形で思っていたとしても

てゆーか魔法じゃなくて魔術だけど。

てゆーか私使えないけど。

…こんなんやつてられっか!!

だって母国を飛び出したことのない日本人にとって周りの景色（お城）、メイドさん、王族なんてなじみのない非現実。ましてや魔術や魔王なんて夢とお伽話、もしくは電波か中二病（重度）。

清く正しい日本女子として素直に現実として受け入れられて良いものではありません！

いや、ファンタジーとか魔法とかが好き故に小説とかいろいろ読んだりしていたからこそむしろ現実味が持てないのかしら。これで自分が魔術使えたらまたもうちょっと違うんだらうけど。ケツ。

しかし少々自暴自棄な思考に陥りながらも“郷に入っては郷に従え”と、頭の隅で偉大なる先人たちの残した言葉が囁かれたので

とりあえず受け入れることは今のところ置いといて、現実を認めようと決めました。生きていくために逃避ばかりはできませんからね。せめて現実味が無いなりにこの世界を見据えて知っていかなくては。自分の身を守るためにもこの世界のこと知る必要があるけれど、あまり深く考えずに“存在する”ということを確認することから始めよう。宰相さんのお話を聞いていたときみたいに。

話はそれからだ。

そう結論付けた。

諦めのおまじないと先人の偉大な言葉（後書き）

更新遅いくせに短くてごめんなさい…。

美人姉妹のお姫様

私と由梨乃ちゃんはお城の中をメイドさんに案内してもらっていた。

ミルクココアみたいなピンクがかかったチョコレート色の髪にはつちりとしたアメジスト色の瞳を持つ綺麗なメイドさんは由梨乃ちゃん専属のメイドさんで、由梨乃ちゃんの世話の合間なんかにはちよこつと私の世話もしてくれるというかんじだ。紺色のふわつとしたワンピースに白いエプロン、白いタイツに黒いストラップシューズという美しい出で立ち。

最近日本の所々で目撃される「萌え」重視のコスプレなどではなく本物のメイドさんに私は内心テンション上がりまくり。

メイド服素敵だなあ、あの服私も着たいなあ…

少女趣味を持つ私にはたまりません。メイドさん素敵。

由梨乃ちゃんの世話の合間というのは朝由梨乃ちゃんを起こす前に私を起こしに一声かけに来たり、由梨乃ちゃんが王族や魔王討伐チームの皆様と食事をいただいている間に私のご飯を部屋に持ってきて食べ終わったなら食器を回収しに来たり…

そんなもんかな？

広い城内の廊下をメイドさん先頭に、3人分の足音がコツコツと響く中で由梨乃ちゃんと何か話すべきなのか迷ったものの…

宰相さんに協力することを懇願されたときに彼女は独断であっさり了承したところを見ると、彼女も特に私と話を合わせようという気

はないのだろうか」と判断した私は沈黙を続けた。

由梨乃ちゃん、聞くべきことは全部メイドさんに聞いているし。

もともと「おはよう」「か」「ばいばい」の一言くらいしか言葉を交わしたことはない間柄だし、話したところで大して会話が続かないだろう。私は1対1の会話がとても苦手だ。沈黙で済むならそれが一番気楽。うん。

そんな中、突如としてこちらへ駆け寄ってきた第一王女のロゼッタ姫様と第二王女のエメリア姫様。

「私たちも一緒にユリノを案内するわ!」

と、お2人そろって意気揚揚に王城案内ツアー（私命名）にご参加されました。

既に由梨乃ちゃんに懐いているらしい。由梨乃ちゃんを挟んで3人並んで腕を組み、仲の良い女子高生さながらに次々と場所を移動していった。

お2人とも金髪碧眼でよく似ておられます。

しかし年の差や服装の違いの故かロゼッタ姫様は綺麗系、エメリア姫様は可愛い系といった感じだ。ロゼッタ姫様はサラサラなストリートヘアでワイン色に黒いレースが上品にあしらわれたドレスが、エメリア姫様はくるくるのカールヘアに青地に白いレースやフリルをたっぷりあしらったドレスがとてもよく似合っておいです。眼福眼福。

それにしてもお2人とも、私の扱い空気。

ちなみにメイドさんはお2人にとってお姉さんのような存在らしく、
こちらはぜひぶん親しいご様子。

もしかして私から挨拶くらいしなければ失礼なのかしら…とも思っ
ただけ

西洋風の綺麗なお城の内装や外の景色、メイドさんや3人のお嬢さ
ん方の可愛いドレス（私の服も由梨乃ちゃんに用意されたような可
愛いドレスにしてくれたらよかったのに…チツ）を視覚で堪能する
のに夢中でどうでも良くなった。

召喚されたときにお2人ともいらっしやっただから私のこと知ってる
だろうしね。

いや、それにしてもホントどこに視線動かしても素敵な風景だわ
。カメラ持ってないから写真に残せないのが口惜しい。

一通りお城を回った後、お姫様方と由梨乃ちゃんは3人でお茶会を
すると言ってテラスの方へ、メイドさんはその準備をするからと廊
下の向こうへ消えて行き、私は一人取り残された。

しばらくぼつんと突っ立っていたが、お姫様たちが合流してから慌た
だしくハイペースで案内されたので、せっかくだから案内されたと
ころをもう一度周ってしっかり覚えようと来た道を引き返した。

王様率いるお偉いさん方と魔王討伐メンバーの面々に遭遇してしま
い、旅についていくことを脅迫されたのは日が傾きかけた頃、そろ
そろ自分の部屋へ戻ろうと思いい、その前に目の前に広がる燃えるよ
うに真っ赤な夕焼けを目に焼き付けておこうと一人吹き抜けの廊下

にいたときのことだった。

美人姉妹のお姫様（後書き）

主人公沈黙が多いため台詞が少なく、読みにくくてすみません…。

役立たず、図書室へ（前書き）

更新遅すぎてごめんなさい。せつかくお気に入り登録してください
ている方々もいらっしやるのに…

3月に国家試験を受けるので猛勉強せねばならず、今後もしばらく
更新できそうにありません）> < ;（

役立たず、図書室へ

私が自分の持つ秘かなチート能力に気付いたのはこっちへ来て3日後のことだった。

由梨乃ちゃんは今日から魔術の練習をするらしいが、その間私はと
いうと放置状態。

自由時間です。はい。

ま、“役立たず”ですからね。

もう周りの皆様私に期待することなんてありません。従者的ポジションと言ったってメイドさん一緒に旅についていらっしやるみたい
ですし。私が由梨乃ちゃんのお世話をせつせとやる必要はないら
しい。よかったよかった。

だから一日中部屋に引きこもってお昼寝をすることも可能っちゃ可
能なのですが…

さすがに自分の家でもないのにそれは人間として憚られたので、な
んでもいいので何か必要な情報はないか調べてみることにしました。
この世界でも一般に生活を営む上で暴行、窃盗、詐欺、もしくはそ
れらの行為を援助するような行為さえしなければ、よっぽどのこと
が無い限り罪人になるようなことはないらしいけど…

例えば日本の銃刀法のように、地球では国によっては所持している
だけで罪に問われるなんてこともあり得るわけで、モノによっては
所持しているだけで死刑という国だって存在したはず。

『知らなかった』では済まされないこともありますからね。無知は恐怖です。

しかし。

一応メイドさんは、聞けばたいいていのことは教えてくれるけど、彼女もお仕事忙しいだろうから全て彼女に頼るわけにもいかない。

そして過去親友に「極度の人見知り」と称されたこの私。自分から積極的に人の輪の中に入っていきなんて怖くてできない。つまり人から情報を聞き出す能力なんて残念ながら持ち合わせていません！
ということで、私は1人図書室へ向かった。

広い広い、床から天井までひたすら伸びるいくつもの本棚が整列しているお部屋を一通り一周してみても私は愕然とした。

一応、全く予想していなかった訳ではないんだけど…

目に入る本すべて文字が解読できません！

隙間なく詰め込まれている本どれを見ても、見たこともないような文字や、文字というより絵が並んでいるようなものばかり。

アルファベットもあるけどそれが英語で書かれているのかどうかはわからないし、仮にそうだったとしても私は100%日本女子。また、勉強嫌いの私には地球の世界共通語と称される英語だって理解不能の言語。

言葉が通じるから、もしかしたら文字だって通じるんじゃないかと思っただのに…甘かったか。

しかし膨大な書物が詰め込まれているのだから1冊くらい…どんなに薄っぺらくてもいいから1冊くらい、日本語で簡潔かつ明確な内容のものを…！（ ）

と、往生際悪く部屋をぐるぐる何往復もして、本棚の隅の見落としてしまいそうなくらい目立たない場所にひっそり紛れていた薄っぺらい本を探し当てた。

とりあえず地球には存在しなかった“魔術”って、そもそもどういったものなんだろう…と表紙をぺらりとめくるとそこには

“魔術とは 自然現象を意図的に小さな範囲で起こすこと”

と書かれていた。

…

うん。『簡潔かつ明確に』という私の目茶苦茶な希望にピッタリな本らしい。

しかし

簡潔すぎてわからん！…！！

と、一人でツツコミを入れつつ次のページをめくると続きにはもう少し詳しい説明がされていた。

この世界の自然現象はその土地の気候なんかと相まって、多数の精霊が一度にはたらいで雨や雪が降ったり、嵐や雷なんかが起こったり、植物の成長なんかにも関与しているのだそうだ。精霊はそうやって世界の均衡の一部を担っている存在といってもいいのかもしれない。

“基本である水、火、地、風、そして光と闇の精霊は圧倒的な生息数を誇っているのもあって人との生活に密接であり、そのため前者の4つはほとんど誰でも魔術を使える。ただ光と闇は他の属性と比べて魔力が強いため、扱える人はなかなかいない”とのこと。

つまり、この世界の自然現象と精霊は深いかかわりを持っていて、精霊の力を借りて身の回りにのみその自然現象を操る…ってことか。魔術を起こす人間の身の回りというごく限られた範囲のために、精霊がパワーを凝縮できる…ってイメージかな。

間違ってるかもしれないけど。確認する術もないし、私使わない(使えない)し関係ない。うん。

魔術で直接人を殺すことは基本的にはできないらしい。“戦いの場面ではあくまでダメージを与えたり防御することしかできない。殺すなら魔術を使って相手にダメージを与えた後で剣でブスッと刺すなど、自分で止めを刺す必要がある。火とか雷とかも、致命傷は免れる程度。大けがはするけど。”

ふむ。あくまで自然の力に手助けしてもらう程度って考えればいいのかしら。まあ、自然の力ってすごいから人間が易々と万能に扱えるものであっていいはずないもんね。

しかしそれでも私にとっては脅威なわけで。何か対処できるものとか書かれていないか、先へ読み進めた。

“ただし、マジックキャンセラーには効かない。魔術で起こした自然現象は精霊による魔力で増強されたパワーがあるため大きな攻撃に発展することもできるが、マジックキャンセラーには増強した魔力のパワーは無効となる。例えば地球で風や雨、雪が人にあたっても危害がないように、マジックキャンセラーに当たる瞬間にただの水、火、地、風などに戻る。火の場合はたまに被害をことうむることもあるけど、だいたいはろうそくに灯した火くらのものなので吹いたりはらったりすれば消える。もともとの自然現象に比べると一部の精霊による微弱な力である。

しかし実際に存在を確認されたマジックキャンセラーは皆無であり、研究者の間でも「空想の産物」という見解がほぼ全員一致で、現在ではマジックキャンセラーという名詞すら忘れ去られていく。

“ふーん。攻撃効かないとか安全だなあ…あ、でもあくまで魔術が効かないってだけで物理的な攻撃は普通にダメージ受けちゃうか。ダメじゃん。

しかしマジックキャンセラーじゃなくても、自然現象ってことは魔術で相手を拘束したり操ったりということはできないということだよね…？うん、そう思いたい。

それよりも、名前すら忘れ去られかけてることが何故にこんな初心者向けっぽい薄っぺらい本に書かれているのが気になったけど…そろそろ飽きてきた（）。もともと『何か必要なこと』というアウトすぎる目的しかなかった私は満足。

とりあえず、魔術が使えない私は今のところこれ以上知る必要もないかと思って本を元あった場所へ戻し、そして字の読めない私でも

楽しめるような、子供向けの絵本や画集のようなものを何冊も取り出して眺めた。綺麗な絵がたくさん描かれていてページをめくるたびにうつとり。始めのうちはそれだけで満足していたんだけど……とんどもどかしくなってきました。

これはどういうシーンなんだろう……この2人はなんて言ってるの？ ああ、文字が読めたらもっと楽しめるのにいい！！ 意味が理解できたらっ！！！！！！！！

その瞬間、奇妙なことが起こりました。文字が読める。文字自体はさっきまで見ていた理解不能な記号と同じものなのに、意味が理解できるのです。え、何これ。

役立たず、図書室へ（後書き）

ホント、説明ばかりの文で読みにくく申し訳ありません） - - ;
）
説明のつかないことも多々あるかと思いますが…それは作者も分からないまま書いているので

あと、感想を下さった方、無視してしまったような形になってすいませんでした。ちなみに、主人公は「逆チート」じゃなくて「隠れチート」です。

感想書いてくださってありがとうございます（^-^）

もうしばらく更新できませんが、期待せずに待っていてくださる方がいらっしやれば嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2084x/>

魔王討伐について来ただけです

2012年1月15日00時51分発行